

教区護持会報  
第50号  
令和4年12月4日発行  
曹洞宗京都宗務所  
第3教区護持会  
事務所：真福寺  
TEL.FAX  
0771-23-7843

本年も残り僅かとなりました。今年は各地で文化・伝統行事、イベントが再開され、亀岡市では佐伯灯籠や光秀まつりが三年ぶりに再開されました。お出かけを後押しする機運の中、大きな寒暖差に外出時の服選びを悩まれた方も多いのではないのでしょうか。

京都パープルサンガも丁丁に残留。チーム名の「サンガ」は、自己の人格向上を誓い、戒を保って修行する仏教の出家修行者の集まりを表すサンスクリット語「Samgas（僧伽）」に山紫水明の京都の山々をイメージした「山河」を組み合わせたものかどうか。

「国破れて山河在り」戦争やコロナ禍だけでなく、世の中はあらゆるものが変化のただ中にあり、特に急な変化の対応に私たちは苦勞します。しかし、少し心を落ち着けて自然に目を向けると、大地、自然の営みは今も昔も悠々と、好き嫌いや損得なしに、生きとし生けるもの全ての命を分け隔てなく包み、育んでくれていることに気が付きます。

執着を離れ、かけがえのない「今、この時」私たちの命も他の命も、共に仏の命のなかにあると受け取ることができた時、心の中に真の「安心（あんじん）」をいだくことができるのではないのでしょうか。  
来る新年が、皆さまにとって心安らかに仕合わせに満ちた年でありますように、ご祈念申し上げます。

**長興寺さま「格地結制」ご修行**

去る本年十一月五日 爽やかな秋晴れの天のもと、余部町長興寺さまにて「結制（けっせい）」法要が厳かに営まれました。

結制の「制」とは、集団で修行をする際の様々な決め事のことをいい、制を結んで一所に集まり修行することを「結制（けっせい）」安居（あんじ）といっています。

インドでは雨季の間、遊行が困難になることから、出家修行者たちは乾季になるまでの凡そ九十日間、「祇園精舎」や「竹林精舎」などの寺院に集まり、お釈迦様のもとの修行生活を共にしました。

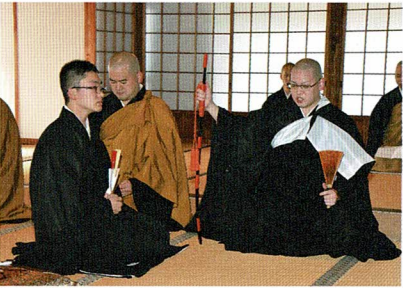
今日、「結制安居」は永平寺や總持寺などの大本山や地方僧堂では夏と冬の年二回、地方寺院では晋山式と併せて修行され



法戦式の主題を公表し、解説をする萩野住職



萩野住職から法座を任される首座の莞爾師



激しい問答が繰り広げられる気迫の法戦式

ることが多く、第三教区では昨年苗秀寺さまの晋山式で、また来年には嶺樹院さまの晋山式にてご修行が予定されています。  
この度、長興寺さままで修行された結制は特に「格地結制（かくちけっせい）」と呼ばれ、普通の寺院と別格の寺格を有する「格地」寺院には、晋山式に拘わらず結制安居を修行することが認められています。  
結制安居は集団での修行ですので、多くの修行僧達を牽引する役目として必ず「首座（しゅそ）」と呼ばれる役職が置かれ、力量を見込まれた僧侶がこれを務めます。  
この度は小林寺（兵庫県篠山市）のお弟子である飯田莞爾（かんじ）師がこの大役を任されました。  
住職は祖録（祖師が残された禅の語録）から一節を選び、これを題材とした「法座（ほうざ）…仏法を説く場」を首座に任せます。首座は、住職に替わり法座を務めますが、その力量を試さんと修行僧達から次々に問答をかけられます。これを法戦式（ほっせんしき）といい、萩野ご住職から法座を任された莞爾師は覇気交じりの問いに気迫をもって答え、一人ずつ力強く説得、多くのご寺院やお檀家、ご親族が見守られる中、見事に首座の務めを果たされました。  
結制法要は見事大円成となりました。誠におめでとうございます。

**【補足】**

「格地」とは、江戸時代に用いられていた曹洞宗寺院の寺格制度における「三法幢地」を指し、曹洞宗で上位の資格・階級を有する寺院をいう。宗義を宣布し、かつ仏道修行のため行う結制安居の回数によって、「常恒会地」（夏冬の二期に結制安居を修行してよい寺院）  
「片法幢地」（夏冬のいずれか片方一回だけ結制安居を修行することができると寺院）  
「随意会地」（三年毎に一回、結制を執行する資格を有する寺院）の三つに区別される。

**昌壽院さま「得度式」ご修行**

去る十一月十三日、昌壽院さまのご長男・大井玄樹（げんじゅ）君（亀岡小六年）の得度式が行われました。

剃髪の儀の後、三衣一鉢といわれる修行の必需品である坐具・衣・袈裟・応量器が与えられ、菩薩戒が授与されました。

護持会役員さま、ご親族等に見守られながら、お坊さんの第一歩となる大切な儀式が円満に成就されました。



緊張した表情でお師匠さまの前に静座する玄樹くん。頭に剃刀があてられ、得度の覚悟を問われた後、周羅（しゅうら）という最後に残された髪が剃り落とされました。



サンガ  
丹山法窟 霊松山 苗秀寺  
僧伽教区寺院を巡る(二)

苗秀寺住職 大谷 教学  
当山は山号を霊松(れいしょう)と、寺号を苗秀(みょうしゅう)と言ひ、永平寺、總持寺を兩大本山とする曹洞宗に属する禅寺です。

昔在(しざい)の寺は長安城の西路陽田の郷丹陽の古刹であり「叢林の靈苗永く無窮に秀(すぐ)るところから苗秀と名付く」と伝えられています。

藤原時代に瑜伽宗(ゆがしゅう)・法相宗の別称)の寺院として能下町(のうげちよう)・現下佐伯(げさへ)野下町(のげちよう)に創建され、人材養成と役所のはたらきも担っていたようです。瑜伽宗徒が数百年の間居たそうですが、平安時代天台宗に改宗。間もなく明智日向守の兵災により煙没、その当時を詳細に知ることはできません。  
寛永二年(一六二四年) 龜山藩主松平



もとは海に捨てられるはずの「廢材」だった石の伝い  
今では参詣者の歩みをたすける大切な役割を担う

紀伊守(まつだいら)きいのかみ)成重(なりしげ)公により再建され、山城国綴喜郡(現京都府八幡市)神應寺(じんおうじ)十六世の石峯(せきほう)寅(いん)けい)禪師を請して開山以後、曹洞宗寺院として仏祖正伝の法灯を護持しています。龜山藩主青山因幡大守(あおやまいんぱのおおかみ)より現在の地を拝領、三世中興の祖である梅隱祖溪(ばいいんそけい)禪師住職の時、龜山藩主松平信峯(のぶみね)公により伽藍が建立されました。時に寶永三年(一七〇六年)、「丹山法窟(たんざんほうくつ)」の名称もこの頃から使われるようになりました。

境内の法篋印塔(ほうきょういんとう)は鎌倉中期のもので、府下二番目に古いものとされています。

お寺の主な年間行持は元旦の御祈禱修正会(しゅしょうえ)、花祭りと大般若会(だいはんにやえ)、施餓鬼会・お盆供養、大日如来(だいにちにょらい)法要、霊松秀成稲荷(れいしょうひでなり)いなり)大祭、大晦日の除夜の鐘(ね)などがあり、総代さんをはじめ護持会の委員さん、年番さん、組寺のご寺院さまのお力添えをいただきながら修行しています。また、お授戒会(じゅかいえ)、節分会、涅槃会(ねはんえ)、春秋お彼岸会、成道会(じょうどうえ)も山内で勤めています。

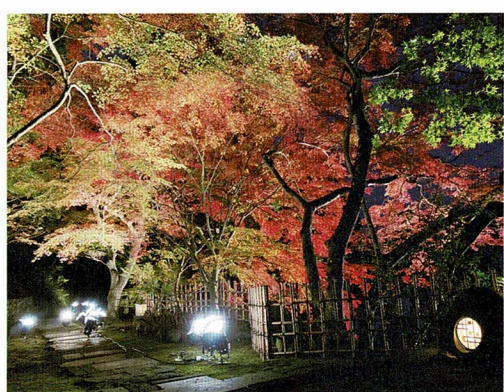
毎月第一日曜日には坐禅会があり、坐禅の後は輪読会でお話をしながら皆で一緒にお茶を頂きます。常に作務(さむ)...

坐禅、看經以外の掃除などの労務が必要で、日々草取りや掃き掃除に勤しんでいます。

近年、写真を使った情報拡散技術の普及に伴い、紅葉の季節には多くの人が訪れるようになりましたが、以前は木々に覆われた鬱蒼としたお寺でした。戦後の農地解放で広大な敷地や田畑を一気に失い、収入が途絶え困窮(きんきゆう)しきつた姿でした。

「この寺は昔「丹波の国方丈様」だけで手紙が届くほどの寺やった。もう一度有名なお寺にして欲しい」五十年前、先々代が遷化(せんげ)し、先代は教職を辞して住職になる時、当時の檀家総代からこのように頼まれたそうです。

「お檀家の皆さんが誇れるお寺づくりに掲げ、寺檀一如(じだんいち)が始まったもみじやつつじ等の植樹、境内の環境整備。特に、もみじはお檀家さんのお家でご結婚やご出産、ご入園、ご入学、ご卒業など、お祝い事があつた時に記念植樹をお願いしたもので、一本一本にお檀家さんの喜びや願い、子や孫の代に想いを馳せられた先人の祈りが込められており、もみじをより鮮や



かつて松平のお殿様が通られた参道  
テレビ局により一夜限りライトアップされた

かに色付かせています。  
また、境内の石の伝いや白象門は、爆破されたりに海に捨てられるはずのものでした。価値を見出されず「廢材」と呼ばれたものがご縁により迎え入れられ、本来のほとけの命を顕し、今では木々や草花と共に命一杯に息づいています。

自然に目を向けると、木々を飛び回る小鳥や吹き抜ける風、苔や石ころに至るまで、互いに否定せず主張もせず、相和して「いま、ここ」にゆつたりと静かに一つの世界を作り上げています。その中に我が身を投じ、拘りや様々な思いを一旦手放し、自然の側から私たちの姿を照らし出してみれば本来無一物、何も迷うことなく、皆が等しくほとけの命の中にあり、生かし生かされていることに気付かされます。

縁によつて生じ、縁によつて滅す、やがては土に還る私たち。人としての生き方、自らの姿を見失わず、「皆共に」日々を心豊かに生きたいものです。



木々と調和する白象門

合掌



「梅花講だより」

昌壽院寺族 詠範 大井 静子

曹洞宗の梅花流詠歌は、昭和二十七年高祖道元禪師七百年忌大恩忌の記念事業の一環として創立されました。梅花流は曹洞宗の詠歌の流名で、詠歌と和讃の総称です。曹洞宗のみ教えにそって、お釈迦さま、高祖道元禪師さま、太祖瑩山禪師さまの恩徳を讃嘆してお唱えするものです。

梅花流の名は道元禪師の正法眼蔵「梅華」の巻さや、瑩山禪師の伝光録の中の「梅華」という言葉、そして両祖さまが梅の花を好まれたことにちなんでつけられました。梅は寒苦を経て春に先駆け花をつけ、清香を放つ、人々に愛でられている花です。

詠歌を学んでいくと、安らかな気持ちになり、正しい生き方を実感することができます。正しい信仰に目覚め安らぎが得られるように、共通の目標に向かって、楽しく生きるための希望と、生きていることの感謝のこころが湧いてきます。

平成七年に十名の檀家さんにより昌壽院梅花講が発足し、平成九年には観世音菩薩像をお迎えするとともに、昌壽院御詠歌を作成しました。



感染対策を講じての練習



心をお釈迦さまのお誕生を慶祝する奉詠

コロナウィルスの禍でしばらく練習を休止していましたが、毎月一回、熱心に地道に続けています。奉詠大会や、梅花特派講習会、山門施餓鬼、花まつり、地藏盆、検定会の受検、観音さまの集い、晋山式、霊場での参拝奉詠等、多様な活動を楽しく和やかに、梅花の輪を広げてまいりました。

令和四年度は梅花流創立七十周年を迎え、記念の年にあたり、梅花流発展に寄与したとして宗務所推挙により詠範の表彰及び長年の研鑽により講員六名に年功賞が授与されました。

令和二年度の全国奉詠大会が新型コロナウイルス感染症の影響により中止になって以降、状況が変化したことを受けて、令和五年度の東京大会開催が発表されました。参加できるのを楽しみにしています。

梅花講員の高齢化と生活様式の変化に伴う講員の減少など、私たちを取り巻く環境は深刻な問題を抱えておりますが、助け合い、仲良い暮らしをし、たゆまぬ精進を重ね続けていくことが、悲しみ苦しみを乗り越えて、幸せに繋がることと思えます。聞く人の心を癒し、私たちの心を仏さまの心で満たしてください。

御詠歌に興味のある方は、気軽に、ご一緒にお唱えしませんか。お待ちしております。

常泉寺さま 婦人会「ふれあいの会」ご紹介

西別院町笑路の常泉寺さまでは月に一度、お檀家のご婦人を中心に地元内外の方々が集まって色々な企画が行われています。

「楽しみながらできること」をテーマに、写経や念珠作り、手芸やお花、筆立てや籠などの雑貨作りなど内容は様々で、お檀家の開本君代さんや長沢幸子さんを中心に企画を出し合い、先生は持ち回り。内容に応じて布切れや荷造り紐、毛糸や包装紙などの材料を持ち寄ってご住職や奥さんも一緒に和気藹々とした憩いの場にもなっています。参加者同士顔を合わせ、気兼ねなくお喋りされるのも楽しみの一つになっています。

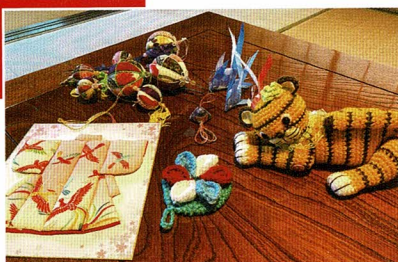
以前、常泉寺さまではご詠歌の集まりがあったようですが、現在は休止中。今年で八年目を迎えられるこの取り組みは、新たにお檀家さんからの発案で始まったそうです。活動日は八月と一月を除く毎月第一日曜日、午後一時半から四時頃迄で、参加人数は平均して十二〜十三名、それぞれの都合に応じて参加や出入り時間は自由とのことでした。



般若心経を挙げ、ご本尊さまにご挨拶



皆さん真剣に「般若心経」をお写経



身近にあるもので作られた色とりどりの作品

インターネットの急速な普及以降、コミュニケーションの多様化は便利さと同時に人間関係の希薄化をもたらしました。コロナ禍以降、お互いに顔を合わせることの重要性が見直されている今日、良い人間関係を作ることは日々の安心や充実につながります。足を運びやすく、地域の人々に親しまれ、コミュニケーションが取れる場としてお寺が機能していることは大変素晴らしいことだと感じました。

この日のお題は「お写経」。本堂でご住職と一緒に般若心経を挙げた後、お写経の仕方を奥さんに習われながら、真剣な眼差しで集中しておられる皆さんのお姿がとても印象的でした。  
(活動・参加のお問合せは常泉寺さま迄)



あるがまま

安楽寺総代 鹿島 茂樹

亀岡市東別院町大野「安楽寺」。里山の集落が一望出来る高台に曹洞宗のお寺は建っています。この「お寺」が大野地区の菩提寺です。

私は三十四年前に住まいを大阪に移し、いつもこの寺のある場所に住んでいてはあります。年老いた親がいる為、可能な時は様子を見に帰って来ているというのが実状です。

私が大野を出て大阪に住まいを移してからもう三十四年にもなるのかと改めて考えると、自分が初老となり白髪も増えた事にも頷ける気がします。そんな年月を感じる今日ですが、住まいを移した当初、いろいろな人生経験をする事になります。いえ、誰もが経験する内容ばかりなのですが、私の場合は短期間に重なり合ってそれらが起こってしまい、手に余る思いでした。

病で父が倒れ、結婚し、長女が産まれ、祖母が亡くなり、次女が生まれ、続いて父が亡くなりました。それらの事を目の当たりにし、体験しながら、「人の命」について少し考える様になったのかなと思います。ちょうどそんな頃に体調を崩し、健康の為にYOGA（一般的には



ヨガと言われているけれど、本当の読み方は「ヨウガ」というに出逢います。

「ヨウガ」は「瞑想」する為に「呼吸法」があり、ハタ「ヨウガ」という体操があります。「瞑想」、「ヨウガ」について書かれた本や「人間の生と死」について書かれていた本を手取る機会が増えてきました。人間の魂はどこからやってきてどこに向かうのか、そんな事を考えながら読んでいた様に思います。

そんな中で、「禅」について書かれた本、道元禅師について書かれた本を読む機会にも恵まれました。実家の宗派が「曹洞宗」だから「道元禅師」や「禅」の本を手にとった訳ではありません。ただ身近な家族の生誕や死からその経験の中で「禅」や「道元禅師」の言葉に出逢ったという方が正しいと思います。

私は普通の凡人なのでどれだけ「禅」を理解し、どれほど道元禅師の言葉を理解しているのか、と問われたら返す言葉はありません。しかし、生きていく上でとても大切に行っている道元禅師の言葉があります。

「禅という主人公とは、本来の自己のこと。周囲の目を気にしてへんにカッコつけたり、人を欺いたりせず、あるがままの自分であること。」

そうだ！ 私はいつとも公私に渡り、つい背伸びしたり、気負ったり、凹んだりする自分がいるので、その度にこの言葉に励まされています。そして、寺の法要や法事がある度に、「修証義」を追唱しながら道元禅師の言葉を思い出し、反省する自分に気付きます。その時が本当の私の「あるがまま」の姿なのかもしれないと感じています。

いつまで生きるのか

春現寺総代 八木 将允

真夜中に目が覚め、ふと昔見た映画の一場面が思い浮かぶ。信長が桶狭間の戦いの前夜に能を舞い謡う場面

「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生享け、滅せぬもののあるべきか、これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ」

これは幸若舞の演目「敦盛」の一節で人の世の時の流れの儚さについて説明しているだけで、人の一生が五十年と言っているわけではない。

今、「人生百年時代」といわれていますが、二十世紀以降、人類は「飢えと貧困」というこれまで人類を苦しめてきた二大要素にある程度解決をつけて爆発的に平均寿命を延ばしてきました。それでは、日本人の平均寿命はどうか。縄文時代は十三歳〜十五歳、弥生時代は二十歳、奈良時代以降は少しずつ延びてきて三十一歳、明治大正時

代は女性四十四歳、男性四十三歳と延び、令和三年度は女性八十七・五七歳、男性八十一・四七歳と発表されており、最近の百年間で寿命はほぼ二倍になりました。二〇二〇年には、百歳以上の日本人は八万人を超え毎年増え続けていますが、百十五歳が壁でこれを超える人はわずかだそうです。日本では十一人ほどで世界でも五十人程となり、人間の最大寿命は百十五歳が限度ではないかといわれています。

寿命がくれば死ぬことは、理屈として理解し覚悟をしているし、動物の中でいざれ死が訪れると自覚できるのも人間だけでしょう。

吉田兼好は「徒然草」の中で死に対して人間の自覚を次のように説いている。

「死期は序でをまたず。死は、前よりしも来たらず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の滴が如し」(第百五十五)

夜明けまでには間があるので一眠りしましょう、お休みなさい。

お詫びと訂正

教区護持会報四十九号 四頁

「令和四年度 第三教区護持会総会議案」の「理事・役員(敬称略)」の表記で × 中島和也(極楽寺) ↓ ○ 中島和也(積善寺)

右の通り訂正し、謹んでお詫び申し上げます。